

# 第84回日本皮膚科学会東部支部 学術大会を終えて

(2020年8月22・23日)

川村 龍吉

山梨大学医学部皮膚科学講座教授

## はじめに

2020年8月22・23日に第84回日本皮膚科学会東部支部学術大会を開催いたしました。全国的な新型コロナウイルスの感染拡大やそれに伴うさまざまな自粛要請などに鑑み、本会は日本皮膚科学会の4つの支部会の先陣を切って完全Web方式での開催といたしました。初めてのWeb開催ということで当初は準備に戸惑いましたが、先行してWeb開催にて成功裏に終わりました日本皮膚科学会総会のプログラム配信システムなどを参考にさせていただき、またセキュリティ保護のため医師のみの限定参加とさせていただいたにもかかわらず1,200人を超える多くの先生方にご参加いただき、無事終了することができました。

## 新時代の皮膚科学

本会のテーマは「新時代の皮膚科学」としました(図1)。新時代の3つの潮流、すなわち1)分子標的薬による免疫療法への治療中心のシフト、2)分子標的薬の治療効果による病態解明の推進、3)AI診断・オンライン診療など新たな診療法の開発—が皮膚科学を大きく変貌させつつあることを体感していただきたと考えた次第です。シンポジウムや教育講演では、私の専門である皮膚免疫が病態・治療に重要な役割を果たす4つの疾患群：アトピー性皮膚炎・アレルギー性皮膚疾患、皮膚癌、自己免疫性皮膚疾患、皮膚感染症それぞれの最新の分子病態・分子標的治療をエキスパートの先生方にご講演いただきました。

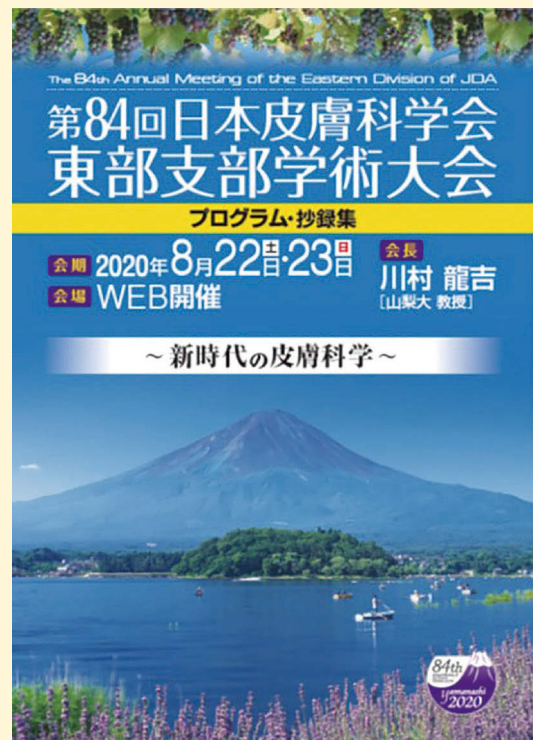


図1 本大会のポスター

## 特別講演

本会のハイライトは国立国際医療研究センター研究所長の満屋裕明先生と本学学長の島田眞路先生による、COVID-19に関する2つのライブ配信によるご講演でした(図2)。世界初のAIDS治療薬を開発し、現在も抗ウイルス薬開発分野で世界を牽引し、毎年ノーベル賞候補にもノミネートされている満屋教授の特別講演は「ウイルス感染症との戦い：HIVから新型コロナウイルスへ」との題目で、ご自身が最近発見された新型コロナウイルスに対する新規治療薬(プロテアーゼ阻害薬)の開発経緯や、効果に乏しいアビガン®やクロロキンに比べて新規治療薬が遥かに強力な抗ウイルス効果を有していること、レム

デシビルと併用することによりさらに強力な効果を発揮するデータなどをご紹介いただきました。SARS-CoV-2を「間違いなく根絶できる」との強い信念に基づくご講演は、われわれを大いに奮い立たせ、強い感銘を与えてくださるものでした。また、最近マスコミでも「熱血学長」として脚光を浴びておられる島田学長には「新型コロナCOVID-19の猛威ー日本の奇跡は本当かー」という題目でご講演いただき、さまざまなデータをもとに新型コロナウイルスに対する日本の現状を俯瞰的かつ客観的視点から“熱く”解説していただきました。「新型コロナの制御」といういまでもっとも関心の高い分野の2つのご講演はともに聴講者数が600名を超えましたが、もし本会を現地開催としていたならば山梨県内のホテルの一室ではとても収容できない人数で、これはWeb開催の想定外のメリットの1つであると感じました。

## おわりに

冒頭にも述べました通り、本会は日本皮膚科学会の支部会としては初の完全Web方式による学術大会であ

りました。さまざまな不安が募る中、幸いにも多数の方々にご参加いただき、Web上のトラブルもなく盛会のうちに終了することができました。「ウィズコロナ」のスローガンのもと社会活動が大きく変貌しつつある中、来年にかけて多くの皮膚科の学会がWeb方式で予定されていますが、本会を1つのモデルとしていただければ幸いに存じます。最後に、本会の準備に尽力してくれた医局員および運営事務局のスタッフ(図3)、ならびに同門会や山梨皮膚科医会、山梨大学医学会などご支援を賜りました皆様方のお力添えに深謝申し上げます。



図2 ご講演後の満屋裕明先生・島田眞路学長とスタッフ。日本皮膚科学会事務局にて



図3 医局員によるZoomでの学会打合せ